



大槻如電雜緝

洋学文庫  
文庫8  
A 146





45  
118  
196

御察度







阿茶度

大坂町

阿茶度

仰信、和主人領分三州、田系八遠州大灘、差出、元文三、東異國  
 船義追、而着意、仰出有、右掛、江表、私心、得羅互、外向、向令、未  
 仕、言異國、之、信、軍、子、木、心、得、不、中、如、何、為、度、し、出、率、あ、り、か、ら  
 同部、内服守、様、子、身、年、山、岡、三、英、の、言、様、の、事、奉、情、情、為、所、醫、師、長、英、に  
 深、お、交、差、也、翻、譯、を、頼、不、も、明、之、言、共、問、令、未、付、升、因、し、大、船、は、推、多  
 付、お、ま、り、方中、第、人、し、も、り、と申、イ、キ、リ、ス、人、日、下、潭、流、人、送、率、を、易  
 相、頼、昔、八、少、承、右、モ、リ、ン、は、遠、来、の、あ、の、ま、を、此、の、復、送、我、不、容  
 易、辨、云、々、仰、出、異、船、の、打、拵、有、し、ら、は、美、國、對、し、由、敵、對、し、し、助、り、相、向、辨  
 潭、人、送、り、来、り、る、七、八、由、仁、連、し、し、助、り、を、あ、り、不、中、に、存、思、し、海、り、西、洋、事、甚  
 申、を、認、外、國、路、勢、に、し、由、由、斷、難、相、半、善、と、認、可、又、右、書、申、出、さ、る、  
 故、慎、拵、論、と、申、を、認、可、彼、是、し、の、身、存、義、と、論、し、後、所、御、し、方、を、認、可、と  
 存、し、右、書、中、多、多、義、事、昔、認、入、義、と、心、附、半、子、致、筆、と、止、め、又、鵜、大



小記鴉七或六等長更三半其外傳すまき草人之伝話と記す西に炎上  
御老若の屋敷に事共事記致是又成書に相成不申事政決して他見  
為務不や小花井虎一三誤と見せしや尤不書共外國に書之  
全存退しし事忍多キ又勢に流しぬ中三の氏後物に勤るを  
ふて不届ぬあまやう

大雨共栲山の孫女の婿に事成りし出たり

辛丑十月丁卯栲物館山名多しん

と親如書

# 椿仲太様

信迄也

忽高書揮淚拜讀此度得奇福事は全好事ヨリ出ツ  
君父ヲ瀆ハ汝其罪不輕且大方之一笑ニ事然ニ用友ニ  
信ニ義全ノ足下ノ扱扱ニ在ル歎已後決獄之上老母面會ニ  
出来不申義及ハレシ老母必憂死可仕況中生存存ノ  
所存無之獄中寛制ニテ食物菓子不自由ニシテ此業  
トト甘おハ  
一カ、ル大罪ニ覺高毛多シ何れも狐狸ニ感、願夢幻  
之如存候  
一香先生始諸友、宣傳傳聲奉祈



一 縛縛せし大道ヲヒカレル時、実々実々、拘り不申、君父の大  
罪人、最早出世所存ま之

一 八面敵多相慎、あやハ主人、忍恨ヲ受、覺ま之何等ノ義、是又  
天命ニシテ尤ル不足ハ

一 猶相心得、之可然義、早ニ御申越、ト書ハ、権平ニテモ大八郎  
ニテモ宜以達、しるゝ、私撰生、必御安心、あゝ、ハ、御強壯、之、言ハ

五三

楮尾

花

本

楮申、寛足下、諾反ノカ、マリ

(一)	東	窓	末	換	ぬ	室	岸	頃	実	な
刀	の	軒	り	春	ぬ	の	の	も	々	流
間	内	の	マ	水	度	浮	り	無	川	

醫學博士吳秀三先生経歴  
先生ハ慶應元年二月江戸青山穩田ナル淺野侯邸ニ生ル、父君黄石先生淺野藩ノ侍醫ナリ、先生ハ其弟  
三子ニシテ母ハ筑作氏、有名ナル幕末ノ洋學者紫川先生ノ長女ナリ、先生幼ニシテ父ニ從ヒ安藝ノ吉  
田ニ赴ク、家庭ニアリテ漢書ヲ讀ミ、五六歳ニシテ唐詩選三體詩四書等ヲ背誦シ、短袴高履詩ヲ吟ジ  
ツ、村兒ト田園ノ間ニ遊戯シ、近隣ノ目ヲ時テシメタリ、八歳父母家族ト共ニ東京ニ出デタリ、初  
メ芝西久保ノ額給小學校ニ入り、後東京外國語學校ニ轉ジテ獨逸語ヲ講習シ、尋ギテ東京大學醫學部  
豫科ニ入學シ、父ノ命ニヨリ醫學ヲ修ムルコトニ志ガシタルガ、旁又漢文學ヲ好ミ子史ヲ讀ミ文章ヲ  
作り、高橋墨山・岡鹿門・蒲生發亭・秋月天放諸先生ノ門ニ出入セシコトアリ、明治十九年十二月東京大  
學醫科大學ニ入り、同二十三年十一月之ヲ卒業シ、直チニ大學院ニ入り大澤教授補教授ノ下ニ生理學  
精神病學ヲ研究シ、又醫科大學助手ヲ兼テ、精神病學教室ニ勤務シ、東京府巢鴨病院ノ醫員ヲ兼テ、  
居ルコト六年、明治二十九年四月醫科大學助教授ニ任ジ、三十年五月東京府巢鴨病院醫長ヲ兼テ、同



五三

楮足

花

楸申、寛足下諸反ノカニヤリ

(一)

末	窓	光	換	ぬ	定	岸	頃	実	な
刀	の	軒	り	春	ぬ	可	より	大	流
間	内	の	て	は	愛	浮		無	川

醫學博士吳秀三先生経歴

先生ハ慶應元年二月江戸青山磯田ナル淺野侯邸ニ生ル、父君黄石先生淺野藩ノ侍醫ナリ、先生ハ其第三子ニシテ母ハ實作氏、有名ナル幕末ノ洋學者紫川先生ノ長女ナリ、先生幼ニシテ父ニ從ヒ安藝ノ吉田ニ赴ク、家庭ニアリテ漢書ヲ讀ミ、五六歳ニシテ唐詩選三體詩四書等ヲ背誦シ、短袴高履詩ヲ吟ジツ、村兒ト田圃ノ間ニ遊戯シ、近隣ノ目ヲ峙テシメタリ、八歳父母家族ト共ニ東京ニ出デタリ、初メ芝西久保ノ賴精小學校ニ入り、後東京外國語學校ニ轉ジテ獨逸語ヲ講習シ、尋キテ東京大學醫學部豫科ニ入學シ、父ノ命ニヨリ醫學ヲ修ムルコトニ志ザシタルガ、旁又漢文學ヲ好ミ子史ヲ讀ミ文章ヲ作り、高橋靈山・岡鹿門・蒲生斐亭・秋月天放諸先生ノ門ニ出入セシコトアリ、明治十九年十二月東京大學醫科大學ニ入り、同二十三年十一月之ヲ卒業シ、直チニ大學院ニ入り大澤教授補教授ノ下ニ生理學・精神病學ヲ研究シ、又醫科大學助手ヲ兼テ、精神病學教室ニ勤務シ、東京府巢鴨病院ノ醫員ヲ兼ヌ、居ルコト六年、明治二十九年四月醫科大學助教ニ任ジ、三十年五月東京府巢鴨病院醫長ヲ兼テ、同年八月文部省ヨリ精神病學研究ノ爲メ獨逸ニ國ニ留學ヲ命ゼラレ、西航ノ途次特ニ蘭領瓜哇ニ立寄リテバイテントオルグノ精神病院ヲ視察シ、歐羅巴ニ入りテ後ハ德國ニ於テハフン、クラフト、エーピン、グ、チーベル、スタイケル、フォン、ワグネル、ヤウレグ等諸教授ニ就キ、獨逸ニ於テハクレベリン、ニッスル、メンデル、ジョルリ、エルブ、ヨ、ベンハイム、ゲルハルト、ベルンハイム等諸教授ニ就キテ精神病學・神經病學ヲ修業シ、三年期滿チシガ、更ニ一年ヲ延期シテ佛蘭西ニ於テラワサン、マリ、デジ、リオン等諸教授ニ就キテ研究ヲ續ケ、再ビ獨逸ニ遊學シ、明治三十四年八月歸朝ノ途ニ上リシガ、其間獨逸瑞伊爾白佛英諸州ニ於テ各地ノ精神病學者ヲ訪問シ諸所ニ開カレタル專門學會ニ臨席シ又其專門病院ヲ視察シテ其建築制度管理ノ方法等ヲ取調ベ、明治三十一年四月ニハ西班牙國マドリッド府ニ於テ開催セル萬國衛生學「デモクラフィー」會議ニ日本委員トシテ派遣セラレ、明治三十二年八月ニハ平生ヨリ志望篤カリシ故ヲ以テ羅馬ニ開カレタル第十二回東洋學會ニ出席シタルコトアリ、明治三十三年四月ニハ論文ヲ提出シテ東京帝國大學醫科大學ニ於テ審査ノ結果醫學博士ノ學位ヲ授ケラレ、三十四年十月歸朝スルヤ文部大臣ヨリ東京帝國大學醫科大學教授ニ任ゼラレ、精神病學講座擔任ヲ命ゼラル、同時ニ東京府巢鴨病院ノ醫長ヲ兼ヌルコト從前ノ如シ、明治三十七年四月東京府巢鴨病院制度改正ノ爲ニ同院院長トナリ、大正八年十月同院ハ荏原郡松澤ニ移リ東京府松澤病院ト改稱セシヲ以テ其病院長ニ任ゼラル、今茲大正十年コソハ明治二十九年東京大學ニ助教授タリシヨリ滿二十五年、明治三十四年同教授トナリシヨリ滿二十年、精神病學ニ關スル教授、研究及其指導ニ從事セシハ勿論、精神病者ノ保護救濟同病院ノ建設經營管理ニ盡力セシコト一方ナラズ、其間明治三十六年ニハ三浦謹之助博士ト共ニ日本神經學會ヲ起シテ其主幹トナリ、明治三十五年ニハ都下ノ名流婦人ノ贊助ニヨリ精神病者慈善救濟會ヲ創立シテ其顧問トナリ、大正七年ニハ日本精神病學會ノ設立ニ際シテ其會長トナリ、大正九年ニハ日本精神病醫協會ノ設立ニ際シテ其會長ニ選バレ、現ニ皆其任ニアリ、著作トシテ専門的論文ノ幾多アル他、精神病學集要、精神病學要略、精神病診斷法、精神病檢診録等アリ、其他醫學歷史ニツキ造詣少ナカラズ、徳川時代ノ醫學、日本産科叢書、東洞全集、眞作阮市、花園書洲等ノ著作アリ、其ノ經歷ノ豐富ナルト性格上趣味ノ廣汎ナルトノ故ヲ以テ交遊亦甚ダ繁ク、當ニ專門學界ノミナラズ文藝美術ノ方面ニモ及ビテ知人交友頗ル多シ、先生ノ病院及教室ニ在ルヤ精勵恪勤、事務ヲ見ルニ小事ヲモ苟クモセズ、門下ノ爲メニ講學ヲ勤メ、進路ヲ開キ、ソノ一身上ノ事ニ至ルマデ丁寧懇切到ラザル所ナシ、今茲大正十年門下胥謀リテ先生ノ爲メニ教授花職二十五年祝賀論文集ヲ編集シテ之ヲ先生ニ獻セントスルノ舉アリ、此ニ其履歷ヲ綴ベテ起草者ノ參考ニ供セントス、

右ハ吳教授花職二十五年祝賀文集編纂ニ當リ、先生ノ爲メ賀詞祝文ヲ寄セララル諸賢ノ便ヲ思ヒ、特ニ先生ニ乞ヒテ其ノ半生ノ經歷ヲ拜承シ、茲ニ之ガ概略ヲ綴リテ相頌タントスルモノナリ、

大正十年二月

吳教授花職二十五年祝賀文集刊行

發起人 撰



















天目山... 卷之... 目錄

Handwritten text in columns, including red characters and vertical lines. The text appears to be a list or index of items, possibly related to the '天目山' mentioned in the header.

方外友卓堂... 冊子... 乃西域筆... 筆全書... 言其意... 干紙... 工筆... 食動... 崎... 安... 幸... 是...

Handwritten text in columns, continuing the notes or descriptions from the previous page. The text is written in a cursive style.



宇田川抱負 宣政九年十二月四十三壬辰四十二  
情以形

丹時堂年報 田山桂一印

蘭通詞梅林鏡之助書留

一 銀六世也百目 作定一印七印川之居引助定

右者若書梅子新一式品川梅子世流、品川美多梅林三郎本木昌成  
國北村元助在四人各書一、借清、七加永三年正月十日、品川美多  
以借清入由

右梅子利元代 宣政元年申十二月廿八日用方は九納

一、可貫五石目 此二ツ刻出子者品川美多梅子  
三ノ子也十日 此書定一印也

文久二年壬戌三月十二日、宮如山君年五十九客歿于長崎、嗣逸三、斂葬于略臺寺、同年逸二没、門  
人伊篤為君建碑、君名敬作、如山其號、伊豫守和郡伊崎人、父若大跡、母竹内氏、家世業農、至君  
始學醫、年二十二游長崎、將行、父戒曰、臨事勿以吾為念、君諾而行、師事蘭客支伊勃兒、篤者六年、  
支伊氏西洋俊傑、視君殊厚、遂授印信、其時還、適得罪、連及門人、舉皆驚愕、君自奮曰、既師之、  
安避其患、輒詣官、自辨不允、入獄二年、得原而歸、居喜多郡上須戒、醫業漸行、後奉父、徙于宇和  
郡印街、遠近皆來請療、遂家焉、安政二年、宇和島侯、舉津藩醫、既而再游長崎、會支伊氏復來、  
航見君大喜、愛遇愈到、而請治者日益眾、整生恒至數十人、君為人磊落、不拘小節、好飲善談、而事  
親孝、待人恕、遇事勇、為解紛拯窮、未嘗見難色、至于病、則不同貧富、輒往施治、愛人之誠、一出  
自中心、故莫不愛敬者、其不幸無壽、噫、其可悲也已、妻西氏、先年没、舉一子、一男、庶子一人、女、既養于  
良、伊篤乃支伊氏女、而佳、長崎者、銘曰、  
於戲如山、醫者之碩、仁術所加、人蒙其澤、豈特曰醫、雅存忠赤、嘗繫獄中、心則夷白、身雖客死、

伊篤



有安其宅 皓臺之軒 永世銘石

同郡上甲樣模文

大正七年七月十五日

古賀十三郎 ウツス

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

藤野製

宣統七年生

先生美馬氏諱茂親字順三如柳其號同波人家世為藩侯族池田氏臣考曰與三右衛門先生其  
第子也年既長奮然有遊學之志恐兄妹勾引之雷書不辭而去初之京師遍訪良師既而遊長崎  
主和蘭譯司中山君知雄家與子夏音於周竹溪後恍知雄蘭學之說而歸焉乃學翻譯於子潮  
吳州池淵三子學度數於獨笑翁而親炙蘭醫朱勅兒德不甘寢食者數年於是年其業大進  
先生為之剛健嚴厲動必以禮其於朋友無二諾不恥惡衣惡食固執以身殉道之言知雄愛其忠  
幹甚善待之與諸家謀請之於官使出入蘭館以便其學又使卜居市外以引生徒時父有望焉居  
一歲以父政年乙酉夏六月十日卒享年三十一葬大音寺中山氏之墓域先生善屬蘭文所著產科書  
蘭人刻之船載以來其本今存他無索者惜哉諸友生徒厚葬建墓使銘之銘曰  
生也殉道沒也泣人異域刻稿 佗卿埋身 旌爾靈節 錫茲貞珉 志雖未遂 名終不埋

周防

岡研謹撰



同社十郎後

外瀬

子朝 務儀他

吉雄三郎

十間 吉雄後

品川梅三郎

吉村三郎

今村三郎

今村三郎

松村三郎

吉村三郎

今村三郎

藤野製

拜啓

御質問之件左ノ如ク返答仕候

一尚之進 定之助ト申モ有之 耕牛先生長子ニ長高太村ト住居致事有之

尚之進ト申モ存不申也

一吉雄忠次郎 耕牛翁

作次郎 耕牛身 左七郎 忠次郎 年齢不詳 異洲 天保四年

一及ト申ス 號ニ有テ先年或ハ書留ニ於テ一見致不吉有之候、尚取調ノ上返答可仕

一馬場為八郎 天保九年十月十九日 行年七十歳

一吉雄權之助 当地田家ノ所藏ニ係ル長崎地役人名簿 文化九年調ニハ未ダ六次郎ト有之

イフ権之助ト改ノレモノカ存知不申 尚取調可申也

一幡崎鼎 菊谷未藏 シーホト事件ノ際ニ 菊谷藤太ト申候

内通詞不頭見習ナリ 今龍町ニ住ル 天保ノ際ニ 藤市事ト申候 滞在致居、奉行所ニ 借寄



尚ほ他件之就、萬縷後鴻、諒中候以上

大正九年七月十六日

古賀十二郎百拜

大槻如電先生 函丈

一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、  
十一、  
十二、  
十三、  
十四、  
十五、  
十六、  
十七、  
十八、  
十九、  
二十、

藤野製

柴田方庵先生墓誌銘

先生諱海守谷王姓柴田氏號方庵常州水友父曰傳左衛門母某氏為人正實處事周密夙為  
醫天保二年辛卯六月來遊長崎學于蘭醫志遠僕兒者術益精常延談致輿論稱為醫  
中巨擘仰治受業者爭接止之終留家焉先生有兄嗣察然每寄二親以奉養之資間及珍異又造  
其退老之宅嘗歸省其國君 齋昭公頗見優遇待爾後屢受寵賜器物金帛之外至于寫聖詔  
短刀等後符命班中士 飢粟五石以便遠使先生家古之間富室石崎氏無子養馬田氏兒以為嗣曰大介  
慈愛過所生安政三年丙辰十月八日病卒享年五十七遺言 贈字家以金若干及前賜刀并禪林寺  
後新築大介請銘銘曰

創業之易 固是其人 特原立首 不啻術仁

安政四年丁巳十月

山本晴海謹撰

玉園云  
志遠僕兒者  
曰一ホルトナリ方菴  
カ長寄ニ来遊シ  
順ニシホルトノ故國  
歸帆ニテ當地ニ居住  
セザルニ以テコノ託交ハ  
モトメテ誤ト認ム  
恐ルムモ一ニハシニ  
款テ留テホクモナレハ







能は勝る者五人を徴し之を佐せしむ頼直  
之に與つる其年三月藩爲に一人扶持を加増  
し五石の俸米を賜ひ格式白札に超進せしむ  
其考ふる所の曆本永く浅草銀曆所に用  
いし寛政八年江戸に歿す常々藩主のため  
鷄自鳴鐘を造り之を獻す其形笠上雞を  
作り時至れば自ら鳴く萬年鐘を造る半にし  
て病に罹り遂に成らざる已む著る所機  
功圖彙三卷あり其目に掛時計枕時計  
尺時計茶汲人形五段返連理返龍門籠

鼓笛兒童搖籃闖雜魚釣人形品玉人形  
の十三法あり時計は大抵搖鐘の理を應  
用し之を造る今日の製は異るるが茶汲人  
形以下に至りては重力磁力等を應用し小  
兒の戲具とせしむ世用は益るる雖も其機  
巧の發明素より尋常の玩物視るべきにあ  
らぬ其幕政のせむ於ては理化等の知識  
を有す此の如きは平賀源内以後一人あり

沢田松輔君の抄略

大正十年七月廿八日

如實



雁かね第二十號

●日本寫眞の開祖

狩野家畫伯 九拾一才 下岡蓮杖翁略傳

下岡蓮杖翁、本姓は櫻田氏、通稱久之助、文政六年二月十二日伊豆國下田に生る、父與惣右衛門は浦賀船政御番所の判問屋を勤む、翁は三男なるを以て自ら下岡家を作る、翁幼にして書を好み、年甫めて十三、畫家たらんと欲し、密かに家を脱して江戸に出てし、も、事意の如くならず、足袋商の丁雅となる、翁一日店頭に在り、一顧客の足の寸法を取る、顧客甚だ、傲慢なり、翁意へらく、巨萬の富を爲すも終生、他人の足を拜すかと急に足袋店を辭す、之れ翁の性質の一端を見るを得べし、幾ばくもなく江戸の畫伯、狩野董川法眼の門に入り、専心書を學ぶ、法眼、翁の才機を愛し早くも、董の一字を與へて董圓と號せしむ、後董古と改め、全樂堂又た傳神樓と稱す

弘化三年閏五月廿七日米艦二隻、浦賀に來り新水を乞ふ、六月七日米艦歸帆の時、翁は書を能くするの故を以て艦内に入り、尺度筆硯を以て畫す、嘉永六年ベルリの渡來迄、翁浦賀を防備する八年、此間四回の外船に接せしも、未だ宿志を得ず、越えてベルリの再來或は、伊豆下田に露國軍艦長フーチャチンに接し、又た有名なる横濱開港談判の米使ハリス等と親しみしも、尙素志を得ず、只通辯ヒユースケン氏に、山中無人地に入りて撮影の形式を學ぶも藥液の名も知るを得ず、横濱開港成るや米國の寫眞師ウンシンなるもの來りしも惜んで教へず、唯ウンシン歸國の折、翁の畫と寫眞機と交換せしのみ、翁は其寫眞機と殘れる少量の藥液によりて研究するの苦辛名狀すべからず、而かも當時尙は攘夷論の烈しき時、洋風の業に熱する者の危険如何はかりぞ、浪人の刃を恐れ、世評を懼る雪隠を暗室に代用する等の事ありき、然ども時代は次第に開化に進み、文明の嘔

翁の門下より出づ、翁が撮影の初物の中聖堂の木像撮影は博物館に今尙は藏せり、時は大正の新紀元の八月寫眞に貢獻せるの故を以て東京府より木盃を贈らる、斯くして寫眞に成功せり、而かも幕末に奔走せる翁は特に勤王の志深く、一日翁懷舊の情に不堪、往年ハリスが開港條約成りし時下田に宴を開きハリス等と會飲す、會談中ハリスが曰ふ、日本は微弱なれば、如何に争はるも外國と五十年間は戦ふべからず、然るに明治維新後、皇威赫々、台灣戦争は、早くも海外に皇威の輝けり、翁直ちに起つて、函館戦争と台灣戦争の大作物を畫き、皇政の内外に輝くを示す此畫明治九年に公衆に展覽す、之れ日本のパノラマの開祖なり、此畫後年、守田實丹の寄贈として遊就館に藏せり、翁尙は開祖としての業あり石版印刷と牛乳搾取業及び乗合馬車を京濱間に鐵道の始むるまで營めり、翁は開祖の多き中に、更に開祖に近き一事



日本寫眞の開祖

狩野家畫伯 下岡蓮杖翁略傳

九拾一才 下岡蓮杖翁、本姓は櫻田氏、通稱久之助、文政六年二月十二日伊豆國下田に生る、父與惣右衛門は浦賀船政御番所の判問屋を勤む、翁は三男なるを以て自ら下岡家を作る、翁幼にして畫を好み、年甫めて十三、畫家たらんと欲し、密かに家を脱して江戸に出てし、事意の如くならず、足袋商の丁雅となる、翁一日店頭に在り、一顧客の足の寸法を取る顧客甚だ、傲慢なり、翁意へらく、巨萬の富を爲すも終生、他人の足を拜すか急に足袋店を辭す、之れ翁の性質の一端を見るを得べし、幾ばくもなく江戸の畫伯、狩野董川法眼の門に入り、専心畫を學ぶ、法眼、翁の才機を愛し早くも、董の一字を與へて董圓と號せしむ、後董古と改め、全樂堂又た傳神樓と稱す、翁業進み、技熟す、時恰も外船渡來の聲頻々、天下騒然たり、翁一日旗下某の家に和蘭船の齋せしと云、銀板の寫眞あり此寫眞は展視する時、氣息を掩ふに非されば影像消ゆ翁一見するや、其妙技に驚き、此術日本に渡來せば、毛の筆にて成るもの何ぞ成す、此時より寫眞術を學はんとの志生る、實に今を去る事凡そ七十年の昔なり

弘化三年閏五月廿七日米艦二隻、浦賀に來り新水を乞ふ、六月七日米艦歸帆の時、翁は畫を能くするの故を以て艦内に入り、尺度筆硯を以て畫く、嘉永六年ベルリの渡來迄、翁浦賀を防備する八年、此間四回の外船に接せしも、未だ宿志を得ず、越えてベルリの再來或は、伊豆下田に露國軍艦長フーチャチンに接し、又た有名なる横濱開港談判の米使ハリス等と親しみしも、尙素志を得ず、只通辯ヒュースケン氏に、山中無人地に入りて撮影の形式を學ぶも、藥液の名も知るを得ず、横濱開港成るや米國の寫眞師ウンシンなるもの來りしも惜んで教へず、唯ウンシン歸國の折、翁の畫と寫眞機と交換せしのみ、翁は其寫眞機と殘れる少量の藥液によりて研究するの苦辛名狀すべからず、而かも當時尙は攘夷論の烈しき時、洋風の業に熱する者の危険如何はかりぞ、浪人の刃を恐れ、世評を懼る雪隠を暗室に代用する等の事ありき、然るも時代は次第に開化に進み、文明の嘔吐はれて翁は一店を横濱に開きしが、日本人は來らず、日本人の少女を寫す爲に一回武弗を與へし事の幾回、而も少女病みたれば、寫眞の爲に生命縮まれりと難せられたりと、寫眞開業後は外人多く來り寫し、日本の衣類、甲冑、衣冠、社符等を著し屏風と石燈籠と一座に撮ゆる如き亂雜を好みたれば、海外にて印行せる日本風俗畫に、怪奇なる日本風俗畫の挿れしは之に原因せる多しと云ふ多數の徒弟を養成し、其中には横山松三郎、鈴木眞一、江崎禮二等日本初代の寫眞師大概

翁の門下より出づ、翁が撮影の初物の中聖堂の時は大正の新紀元の八月寫眞に貢獻せるの故を以て東京府より木盃を贈らる、斯くして寫眞に成功せり、而かも暮末に奔走せる翁は特に勤王の志深く、一日翁懷舊の情に不堪、往年ハリスが開港條約成りし時下田に宴を開きハリス等と會飲す、會談中ハリスが曰ふ、日本は微弱なれば、如何に争はるも外國と五十年間は戦ふべからずト然るに明治維新後、皇威赫々、台灣戰爭は早くも海外に皇威の輝けり、翁直ちに起つて、函館戰爭と台灣戰爭の大作物を畫き、皇政の内外に輝くを示す此畫明治九年に公衆に展覽す、之れ日本のパンノラの開祖なり、此畫後年、守田寶丹の寄贈として遊就館に藏せり翁尙ほ開祖としての業あり石版印刷と牛乳搾取業及び乗合馬車を京濱間に鐵道の始むるまで營めり、翁は開祖の多き中に、更に開祖に近き事あり、基督教の信徒となれる事なり、明治の初め未だ我國に七八人目の信者なりと翁明治十五年頃より淺草公園五區四十九番の現住地に移り、異教徒と淫風盛んなる奥山に住み獨り信仰を異にし道徳を持す、翁の品性其全豹を覗ふを得べし或人曰く蓮杖翁の運の一字、益し淺草奥山、淫風の中に獨り清淨なる之れ泥中の蓮なりと、實に然り、翁、晩年に好む畫を書き、而て狩野本派を守り、其筆畫、密畫、到底九十一才の翁と思ふ能ざるの勇筆なり、精力如何に大ならずや大正貳年一月 親友 水口素風識す







●日本と其の關係

日本と其の關係... 日本は、東洋の中心地として、

日本と其の關係... 日本は、東洋の中心地として、

日本と其の關係... 日本は、東洋の中心地として、

Table with multiple columns and rows, mostly blank or faint text.











